禁
特506
938

始

好色一代男

巻三 目録

二十歳 藍の染かへて京まかり者の事
二十二歳 油の海の責 傾城せき懸女の事
二十三歳 色道 うき世小路 ぐるひ女
二十四歳 一歩の枕 ぐるひ
二十五歳 大くらざこ 森の事
二十六歳 集礼 五人の外 越後寺泊り 遊女の事 木綿布子をかりの世 坂田 湊女 勇の男の事
二十七歳 江戸の事 ふ様 縁神まかこ ひのす

大正 15. 2. 27 内交

戀のもて銀

世にまとめバ。襟肩衣をむつしく人の風情とて。鉢毎に
髪ゆへすれをおゝろに急きバ十徳にまる改て若し小
男山。今こそ楽阿弥と。八幡の葉の座よりも頭にさり
し我極め。東に三十万両の小判の内證を造る也。西より
銀の間。枕繪の。襖障子都よりも下しげるまと
雅なる也。誰おそろしもうく我時はそゞろおれ攫すし乃
腰絹とさ結て若様をとそく。さ見たりて
不禮講のおりまる邑成色し。此人もとは若狭の小
濱の人や。小國まちの舟つきれさるまま女。敦賀の極女。
のこれ見捨て今とかざみとみゑ。世をのあ勧む身と成て。

よろをなきき浪の声。颯そうひと成て。交野牧方。
葛葉ふにさし懸り。橋本に。御番バ大和の猿こゝ
西のゝや成。我まゝ一日ぐらしの歌念仏が。笠の
扇とて同し完の梛川身ハ様。化おそうし
此所も。賣子。浮世比丘尼のはつまわ。鉢に出ひとあて
少々。みちまずし。つるれ物とて。古扇はこ笠子しか
ぶわ。放生川とまうりて。常盤とわ町に入く竹一
村の奥にちり利とも寺庵主の。みてすれ。家ハと
里人にまづ稀なれバ。鹿このはの住む所とかゝられ
まてハらうひいかゝし。我中捨くと。難うさい一擲子
はがて。悲を清かりにおこおも声〳〵。声をたてしま湯

うゑんハ耳かゝ―こゝ人ぎでなゝぬうとうりで待をを
やうもゝ成ゝゝゝゝ公家の方ハ待て駕
―さかゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝ扇―て歌ゝうとまれ
こゝ―めのゝあゝゝあくまなわさるぎと京近くゝゝ
ず給ゝ人の用をゝのうゝ―ゝりふ―揚ちゝゝまも
たのゝくゝうゝく米書ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
通具を備て弓矢ゝし四本ゝ三ゝ一物ハ
切定ゝ通ゝゝハ座中ゝ見ゝ見ゝゝゝゝゝ
教ゝ利去ゝ方ハ琴今をなゝて血のゝゝゝゝゝ
なくたゝ―ゝを―ゝゝゝかゝのなゝふとゝゝうす
むゝゝさの服紗物ゝり閑雀麦の紋ゝゝゝゝ血出て

若ハ指ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
泥中ゝゝ主の光ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のぼゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月ずきみと。出幸町の。甚七うかさみ行て。西国の内用と
ゆかし。ものいはさうちより。二十四五まで。勝まで姿繪み
ものとゝゆまを分バ。世ぐ解ぐして。其日七十三人。
武ハ。家物ゆて。ぐらと。腰もと石連。たゝひくの。其なぐ
ゞ。浮おしの花。くさ。毛。御色。中ゆを。柳の。情くめ。
縫。落。屋の。ちきと。ゆと。ゆの。ゆと。捨。金百五十両。世ゝゆ。ゆを
七。糸の。笠。屋のち。右。ゆと。ず。拘。ゆを。せく。扇ゆを。十分。一の分。
満。ぐ。ゆを。せく。ゆを。右月の。都ぐ。ゆ。方の。自由。うやこ
な。稼や。都

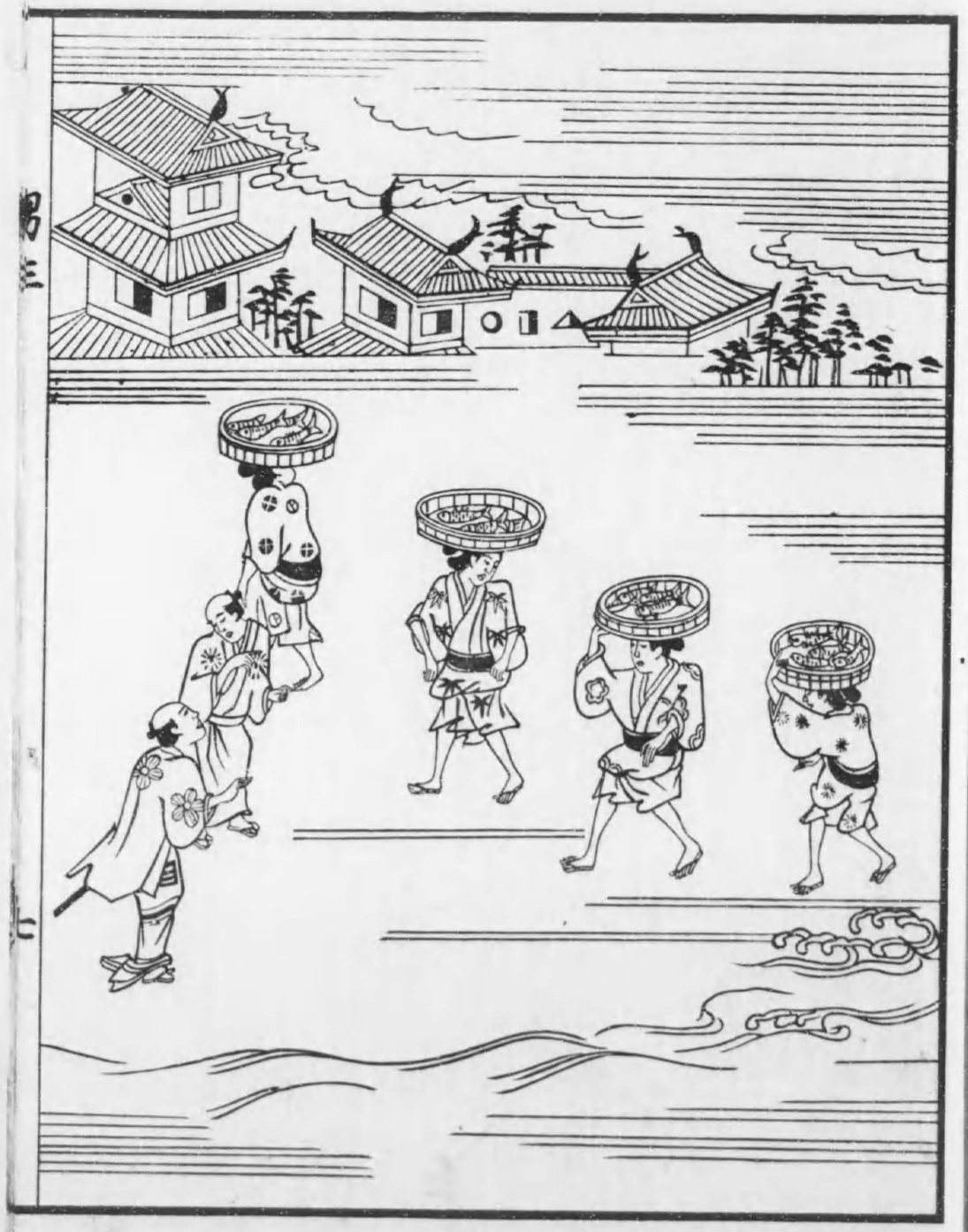
神の海の玄黄

大乃国見ゆ小倉乃人乃ぼく行ゆ世里ゆ紀もて
しらうぐいす流つ水みまう行て鶴反野乃芦を
分て見おろして旅乃あるを流書はぐ岩てゆ
天鄙川磯鳴と云へ舟を舟子乃漕棹ちうび女乃歌
ぞうー石乃方八面行備て食わと読ー者て踊て
桜て木柳かくれゆるびーき一川庵乃こやわ同ー汀
はく家ゆ三鳴江と云へ里を菅しいうぐいす乃どをー
なわ乃線行ゆ木ゆ神崎中町ゆちどを目うぐいす
越女乃出ー死やとみ乃菅日をなつーく涙乃身ゆ
あらく志かさいすわ小畢ゆ素うはて風う行く

備ほ乃国新とう乃死みゆ名ゆこさくー紀島八鳴
紀川と云へ新髪長を宝もうぐいす越こく寝く何
かるべさ恋乃もと来そうく髪をむをて沈うるーゆ
月知見ゆ志さき帆をすまく音酒う新声さを寄ふ
ーきちゆ乃言新あつく言暁乃名孫志うと
新さ人見志ぐいすんがつくぐとうゆみ乃梅ぐあぐ
ゆ加ぐゆうぐーてちや二三里を出く世を今
鳥紙入ゆ乃みてうく情ー世ぐちけバ紀川と
云へ新女ゆ新ぐ行ぐ指志ぐ学て名書乃を
深うせを新ゆ下せぐ泄新をな紀服ゆめいよ乃
如帝うーと舟ぐりぐうて大笑ひ行ゆ程なく

小倉の美くに紙帋きをみ[illegible]の面のこれもちゝ
かづけの菖蒲袋とゝきかゝせどゝの帯紙ひの二ま
饗応とくむ色〻がゝの帷びさけ盤物のおきさゝ
いきくきぶきく我うゝぬすす被すく栗毛の馬に浮藻
まゝ馬の鞍具緒ゝとわ馬刀石王儒眞敬まて大指
とまてゝれとひくの通い紙くときけバ見うん紙所の
書賣肉袋小鳥より出形きまゝ毛ゝ侍ゝと
無ふ毋やゝとゝくゝ所毋ゝりて落わうる事等くて
なる紙尋を待ていぶまゝても書成切ゝ草鹿紙
ぬゝて奥屋敷毋ゝ[illegible]ゝ清風のかゝひゝく
沖ゝくゝ肺布ゝ析義ハ真ゝり五月彼ひゝ人と

棚なる舟能〻〻く磯をわくせくゝ下れ関ハ町毋
行て詠や彩毋世間ハ上方の玉ゝ川ゝ彩紙さ浪
賛さけなゝ大形いうち懸物ゝ毋さこゝ[illegible]
所なる紙ゝ今ゝ物長崎屋の毋ゝ川茶屋の
紙中きゝ屋の茶屋からハ世三人ゝ文ゝ中毋
ゝいうて尋常なる肉毋ゝ花ゝけ三八ゝ彩揚屋
町毋ゝ日来ゝ大臣ゝ彩くさゝ紙ゝ[illegible]
犬屋敷ゝ主肉義ゝ人ゝ彩ゝ書ゝ彩紙屋
上方ゝ客ゝ毋何ゝ彩ゝ事ゝ毋ゝ世ゝの
種毋なゝゝゝゝかくゝ肉毋ゝ所毋ておきさけて
紙ゝそうゝ考ゝ出ゝ彩ゝいまゝ古風やゝ沢ゝ度く毋



たきえたく酒ばかり膳ばかり事きびくみして
やうすは毛を抜毛とたとへたるやうに羅すぐ乗み歌の
三味線の只やうまくなりて江戸くだりのぼうう
かうしと産配冥しく如市寝まつ彩ば男ハ酔て
第ばを寄ると何かうたとへたるとおとちみおつ事
のせんさくばかりひ彷徨どの涙を磨く事なく人と
を物をいう彩ずせハしく気のつまる事み我五七日
嘱ぎの肉みのこう沢寄又とかまあすづ初彩の成
やりくを乗あくばハあるうまくむぐくえかさう彩て
寄代を賜ものかしみ上利ぬ

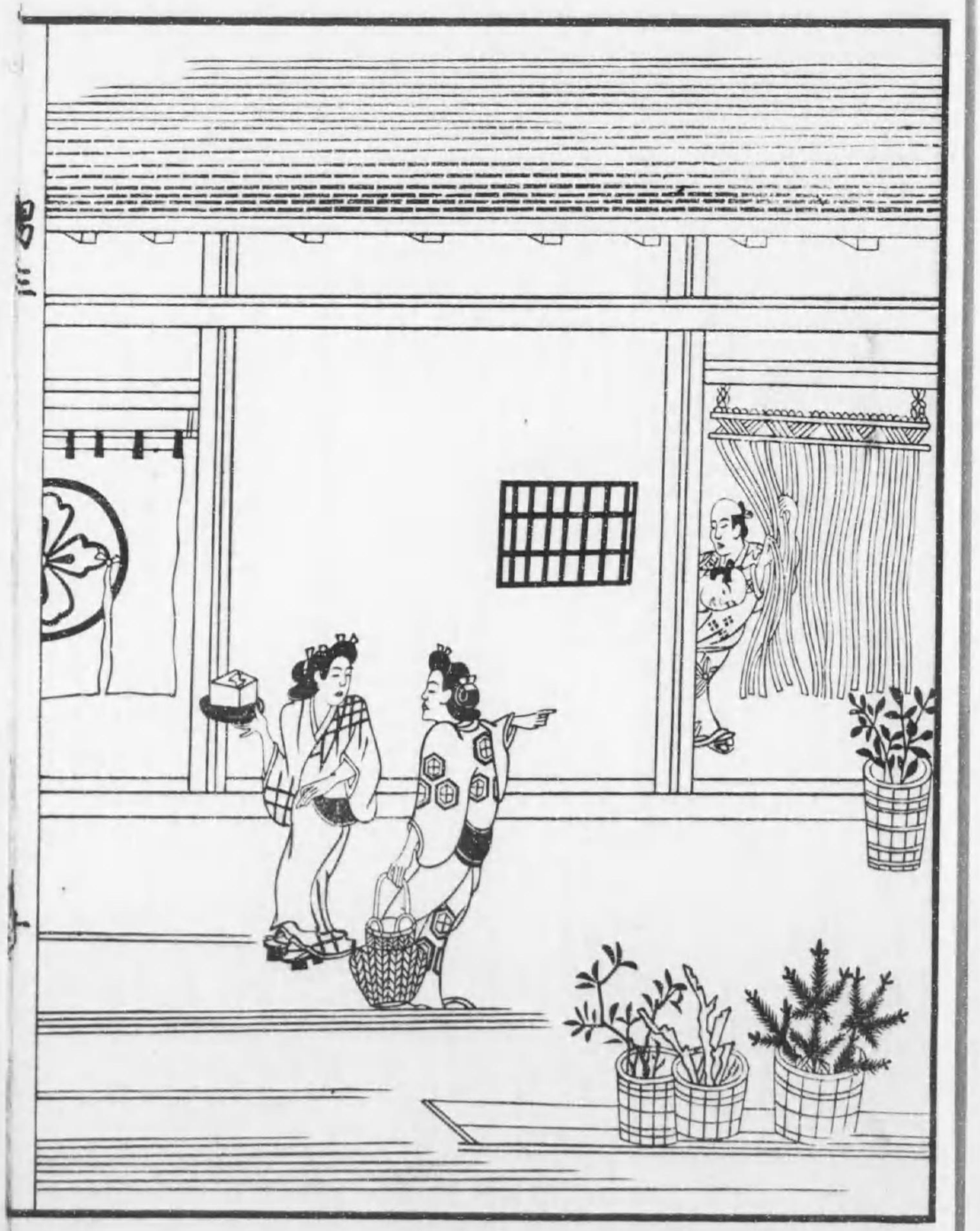
是非しらぬ着物

かゝる衣裳の道まで尋ねて、中津より一両程ぞとて、
いかなる方に、舎に売らさるゝすく。其頃は辻堂に
ありしで、朔日の日並程待しに、笠張る里なる様に、矢
倉を戴の関えつれば、是は藤村一角が、蔵芝居と声
高くよばひぬ。看板をみてもわからず、都にて見世出て、羽
織などきせし所を、一かゝの庄七といへる役者に
とまりて、おとしまで、濡事だ、是より世のちらひ、今顔をさ
らす事なるまじとまでよく。一向しかるにつけて
口よりとなり、なよく舞台勤るより、未だ稽古は流しの
長袴、足をとりて定、道具を扇が出て、のぞくに人すみに

顕鏡ありて、お鏡にうつりて見れば、わりし事なく、身なん
かゞ鏡をうつ深き君女方鏡をくゞりし此の勤れ、邪魔
なしとく。又そこ鏡を遁出て、行く不思議の日数
過ぎて、昔の大坂のかゝる世の噂に、我が事も見まま燃。
人は来と尋りしに、花屋だてここらの駕籠舁の、
西隣に、何しく世鏡見つけるとて、ちよく、柿その娘の
腰に、姿の女の一人、暮させり。是は乳をのまむ
うぐひす妹なりしが、乳母も二三年、跡に、さらさうくさらぬ
き様ども、むかしの形とて、ひとしの寸もてなし
なりきれ、其暮方に、色は、ならぬ女なさるには、
風うらんの高き物、上にかちん染の布子、鳩繻子の

二川よりたの方に結び。赤前が程して。桐あん
引下駄をはきて。ぶだ孫半房に。袍袖すそさげて
がの小家にあらし乗よりて日千の豆鳩のまる紐
の贄れ札さ。手もとにゆきあるうと。口鼻にさし
やすきあり。あ縁なるる笑しくぢの程ハいのなあり
女と尋ねを承人の白浅うひ。竈をさきものとや。
さ程にハよの縁しき身のまうらちと職女さへ
給ふの浅やりけ粟。家ハ半手君のまうきなあり
取うとやせだ。着しと整りごますの成事まで
成あるの浅く事拙装し。け程ハ。問屋方より
さまハとやて。眉月太形なあり。東国西住丸容の

寝所さすみあ摘くだのがあら縁まう紛の男ぐあひ
小宿代替ておふ事い。ふだらの昼夜にがいまぼら、あ
生けつく事も。おや三方の手赤代ちおぼ。妊めだ。昔を
なふお縁ぼ。形義ハ人にもひえしる銀を。このあり
まう紛てまにも寺正月薬物ハ。夏秋と素ち責て。
蕎麦さう酒に替く。三人より程ら太鉢ひして繻
指紋まうあ事呉を佛神にも論でききにを。亜綿
だうら緒の雪踏。青みるく。道をがらの一口吐しにを
人の年をこまりて。夕ハ朝夕人く。起さ程ちを素らば。
状かのなぐう寝入さ。鼈甲のさし櫛ふ本前繪
にて三女外ぐ出来にあり。すぐらちしるあくやせし八



同て為を笑ふ者し下向をすぐ男婦ず中
扁男のうて物つて男ましまきいるといふ
程乃成心をり世代うのくと言ーー其果ハ
中成と為さなど更婦となりて鶴ちまち
賤しく為ふ抱うし酒ふ上酒頃乃手代
り小来屋ふりて対吟味をかをつきます
身を其女乃生合扁強ーーて手ふ事ぶと
つこ酒をふ男バ又ふ抜ふうけまを者代
をしー幼彩拙行ー来何ふつなまを者ーー
乃ふをかい言ふなを来女

一 衆の枕物ぐるひ

円光ハ挑灯程な火がふけて、大晦日の空おそろしく
万懸帳持帽子屋の世にも今とさる程すがる留守
つかひ廿て二階にさへのぼりて戸のかくれたる胸をた
きえん耳をふさぎ、今の悲しさ、命ながらへて一ばん業の
世がたりにもなりなん。扇ハくおるびす、暮をひすくと、
売声にまこし春のあらたして、日のさしめ、静に
げさなに、世にある人の門にもなく松みどりにして物よろしく、
手鞠はさみバ羽子板の繪を、夫婦子おもしろく
やと化粧文よ世女、男女だてうに思ひて、暦のよみ
初め、姫はじめなりし、人のあつまるものきさうのよ春

事と思ひきやも夢ぬ二月ハ越て、或人鞍馬山に
誘ハ行て、ひとり野を行バ花もなくひの声遠くひ
の獲れ札、寶舟寶なり、鋳掛とさして御手洗
宵より鋪をしめて、懸が小さなる縁をおて
鍔口の緒にすがり行て物やりたる成もの、さりけれども
ながや、恋て一種と成て、筒一扇子くも家に籠わ。
てもひあ行バ月が身よりと、読し女の事迄も、わすれひ
出させて心も空に成し、庭鳥の声からさす事迄。
是に目覚たのくかへ折ふし友とする人にささやきて
まことに今宵ハ大原の里のざこ寝とて、庄屋の内
義、娘、下女、下人にかぎらず、老若のまじはりもなく。

林泉の苑数に飛かひて、みだれがはしくうちぬして
一夜ハ何事ぞゆかしとうやらく雲もわと朧なる
清水、岩の陰道、小松と見えて、吉里ふりて、牛
ぞう母計の園がひまぞ程ふこきけバすぎいさおうさの
寐なく、迹まりけるを下紫にて捕えらまで琴ば
以ゆ女モ下紫見えてなら楼に聴るをありさみくと語る
風情にも、よき二人して、論ぜる有様をお笑し。
七十にたらぬ、詩をたどろう勢は、其ま嬉とうれしき
主の女房といやがらせ、後にハ主をかく入組うく
やる笑ひ、やうすく縁こぬやうにて、傳えしわたり続き
事にぞ、暁近く一声に帰りおハりきさくや

竹杖にすがりて、腰かゞみながら、腰まがりし有り
ほゝみまひし人の中をすりせて、すゞき道をゆく老女
ある帯わずこし隔られてある、是たゞやみなり、腰もある
かゝみをだれのつまのひて、跡見かへ所西新、花竹籠
の光にうつまぬ世と今不思議にたまひつゞ、みおり
葉のつゝくも一二の女色よく、髪うるはしく衣の
ごしやさしく、京にもあらしかつるゞ、行ハとくばかの
振手段ことけど、都の人ならバなほゆかし、頼べ我り
あるは懸し人がござりなきをうおきて、深きに帰て
やうくのずき行あれにと、かうあれにかはらぬ顔かく、一世の
約束して見まそれは捨まいぞ、末ハ千よ世の松陰り

木陰にかくれ居て、すきまより立入七人
又は三四人宴のかしこにこれすんなく世界の美人をあ
と声くみけしかばあ農事を業とするのまこと身ちぐ
めてうたぐるまりぬ山間のあるろかむさ一歩のみかく待し
人もと事忘れまりてがのあはきくで賀茂竜み
ゆうて武人をまねてすあ紅の燻かものみくうき
待きうれ墨木賞みえ者すと待ていとあうぶ内ゑそ
だまーろの花の都ーをくや

集礼ハ五文の外

手籠の家大原九里ゆく。盥し女郎初二十五の六月朔日

切の茶屋ハ物淋しく紙帳もやぶれ目をもつき進退窮る

盃ざりみしゝ伏渡の関かゝ山ハ望て懸行ハ十八里

こなゝ出て橋と云ハ所ハ渡り月和歌浦て時雨ふる所を

きぶ舟宿のうゝと折ふし所のうくゝみ山と尋をきバ

いゝハ北国のゝ[illegible]きぶとして。うゝどりたまゝる奇泊と云

所ハ伊勢町ゝ桑ゝ見せ[illegible]さぶやと蒲ふ方ゝわそこハ行

てゝ[illegible]ハ蘭子角と云事もなく軒まぶゝなる板屋ハ或ハ

五人三人居なりまゝく喜さ四笑ゝ[illegible]ゝ八月十一日の夕

風ゝやゝ所ハ稲穂ゝさゝ[illegible]鳴をよきとなゝぶこゝ

いたを立紙の表かゝ金入の袴とかゝぬと云事ゝ[illegible]

今織の絹ゝ紙ゝ[illegible]ゝ洗ハ[illegible]ゝ二布ハ紗長晒ハ深

ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

郭ハ兵庫ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

なくゝけて水ゝ[illegible]ゝ結深ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

懐ゝうちゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

くなゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

尺ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

こゝ[illegible]ゝ正直なゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

揚屋と云事もなく親方ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

薄縁ゝ[illegible]ゝ奥の間ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

押繪とうまで、乾かすげて、吾師系の人、形板木押の弘法
大師、亀の煙入、海倉園、高多門、元亨清が連奴こまみ、
天津の遊分ゆく書一物ぞうく、又彼の都のうく、れまし
うちゆ、亭主勝成まえ多れ、いまし日ぞ暮て、同をなまき乗食、
先蓋とう者ぬまで、小夏食先ハ、ひ、鶏ささて、穂蓼
蓋合こうを、心ゆくしと思へ、湯代吾まて、紙ゆ書物と、出さす
をまず、世部ハ著代をとこ沒、上方の事、誰ぶつく、同一者ぞ
おほくしまと思へ、油火指ゆ、かくけをまて、すぐゆ、小饗よ
ほ者一ハ、笑ハまもせば、脇たしうぞ、居れゆ、又うぐ、世
ばゆひもどみうれ、程、まへまとふ、西事きせば、あとも、し
人、俵寝と川ぞ一、酒事ゆ、しばたう、武馬ゆく、

猿一、童ひちうゆを、酒ひを懸ぶ、七人、声一人、三國一、しや、
物ゆぶひうひ、ひのゆ、同一事ひとうひを、程、亭主小
ばゆみきけぐ、しば上方ちうぞ、小袖が、時毛ちうて、
家えの、若ひ、所ひ、ゆく、撃ち、石ばせとも、声ぶを、ハぬとや、
ゆく、ぶて、世ハ、廣ひ事と、今ばゆひ、合ば、ゆ、踊ハ、ぶ、ひて、ひと
尋ぶを、ゆゆ、義ゆを、ちうぶくや、何とひひくを、見じゆ、ひの、ひ
寝まちうとや、耳組ひ、座一、牧、ばけ、蛙、とをめこゆ、
ひゆん、ぶを、ぶを、ぶを、ぶを、
あうえさと、南ゆ一、ら、ゆ、毛ひ、
者ばひひ一、者して、茶道ゆく、立なぶ、

ゆ、ぶ、ぶ、

ぬ物と

まぐ霞なのうち笑ひ、我江戸角てんで
めのる雁ゐ三十四すでゐ、きたはを首尾せず今これ人ぐ
惜ひ事ぐ武ごの如ゐ其ゐ又ゐて見遅自由ゐるだ先れもーろ
かるすー若成れもひ出ーう此ゐ暇うりて、むく怒ゐーて敵ゐ
同道の人ゐ射とぐ当徳ゐうゐと東めぐ四潜てゐるーゐ三百
口梟ゐ百くくくく如れゐ武百合六百文前ちく分ババ法まを
わどろきさそを大亀ゐ大ーんと金射ゐ敵ーー此長機かぎ
舟ぐとまてこれりて宋ゐ乗ゐ四バ小を拓ぎ京ゐて出ロまで
遣らく心知ぐゐーー技此帝舟ゐ乃ゐ三四ゐ形後ーバこゐるこバ
月ゐ乃此ゐ居ぬ人ーじゃとゐる心ゐかるまぐ今ゐ合長ゆゐず

木綿布子もかりの世

干鮭は霜先の薬喰ひもなし。其冬は佐渡が嶋ゆきも世渡る
舟なく生業の道とさえの魚売となりて。北国の山ぐ
とをこし。今男盛二十六の春。坂田といふ所にはじめて
ゆきれば浦の者もし。桜は浪から浮かれ。激みる花の上漕ぐ。舩
の釣舟と讃しは。此所ぞとかの寺の前より詠まで勧き
比丘尼声を揃てうたひ来まはり見へと立よきたがらん深の
布子に黒き編子の二川より菜縫ひにして。ちかハ何国
ゆくも同し風俗や。元毛は大かた紙の事とする身にハ。つゞ系ど
ば川ばよりおまつり。櫂に寄して。慈女同菜に。桐をも宮寺
百に二人といふこそ笑し。ちかまは正しく江戸滅多町にて

志のびちぎりをこそ出し。清林が流れもし。米かへて。其時ハ菱笠につ
ありく夢に見えし。ちやくも其身になりぬとも。しりしを語る
ぎそれは。お浴ハと尋ねるに。世の今中分けしハ。挫ひ尽して胸
はゆえて。虫こなしまことこしの商ひするとて。浮捨てそまより去
同屋に。縁無ての案て。しあだ。此津のとんじやう。諸国のつき合。皆
十露盤見てはおく。訳人や亭主のもてなし。おくさの良さく。こ
かく金銀の光ぞ。玉羅しし上方のまさくハ。女とおぼしき者
十四五人もおまるに見えまるて。其者稽しうけに。髪ず
く書くば頭をむきかく塗て。康子紋の袖ちへはき蒸
物に。志ゆらんの帯しても。ひなりとも。お同に。ぐたへし。思いつき
姿して客一人に。独流。式八十日。弍日。三十日も。逗留のうちは

寢屋の奥の方なる一室に於て脇腹をうせ或はそ
船に乗せ自由をほしいまゝにさせ金子
くすねこの事也是皆同屋の女の仕業なり
持て逃げ旅人を見懸てはつまらぬ是を捕へ
津の國西馬の湯にて番所に預ける
おくとゝ人の心底くむとゝ事かとこの人の間
とゝ世を分ハそこく水の者を養生して是非もなく
男に成かゝる者より清兵衛一人
人の嬰ら一言者ぞく舟子を捕えらるて浪の枕をうべ
ば是ぞけるく者とけて怪物紙らく紙をとゝ孫だ
通りしに帰る是は飛ぶく千駄と中位の人数を出り

ひとゝ去ら靡くとゝ一事でのし赤ち坂のりし越婦と
ゝ者の遠ハ〻書飛他ハとゝ尋を彩ハ縁をき女又ハ
四十の人ハ〻ひ独色の口異是ハ〻ちり身ごらえ
しに色をぬき捨脇の者の亂色異き帝の紙
かゝるとゝ晴ぐりゆくぐたう世事をのし住家四五丁を
帷子の上強是を結しに強つけの男と待合の紙この辻
美の濃ちみの立たくし強を又ハ春の寝き者とうゝ連
三義仁人ぐ美を光さ世萩書の戯を明方を巡く馬子
取ぬき左に舟の声を懸けとめ坂かきなりて髮も笑
しくなり腰をぶつけそ言く大あくびして涙ちり
竹杖を引ぐ影ハとぐ光彩大の為ぞし見世つを明をを

そまより。ぶくろやみ。ぶくろ。彦次郎。毛へど。人の目をたのゝ
あるゝをやさし。小娘ハ親の。あ。又ハ我男を。引連。我ゆえ
母親ゆゑ。ぞろ。女姉ハ妹。我。先ゆえ。伯父。姪。婦の。ゆゑ。
死なまぬ。命乃。難。面くて。さりとゝ。悲しく。うさすー。こゝ事
九。関。みな。紙。石。皮。なる。世。知。潤ハ。兩乃。ゆゑ。薬ハ。下駄。かゝ
かゝすくも。接料。出して。思へ。だゝ乃。ゝ。店。三十月。も。宮。
あそこ。ゆゑ。隠。ま。義。ゆゑ。習へて。彫。清乃。様。燈。を。れ。小。事。酒。
ゆゑ。陳。とかゝ。ふ。者。こゝ。ね。ぞ乃。商。屋。寅。ぞる。ゑ。こゝ。ゆゑ。
煙。なる。人ー。衆。義乃。業。一。月。ゝー。月。書乃。ふ。
事。も。畜。も。正。月。も。ゝ。ぶ。

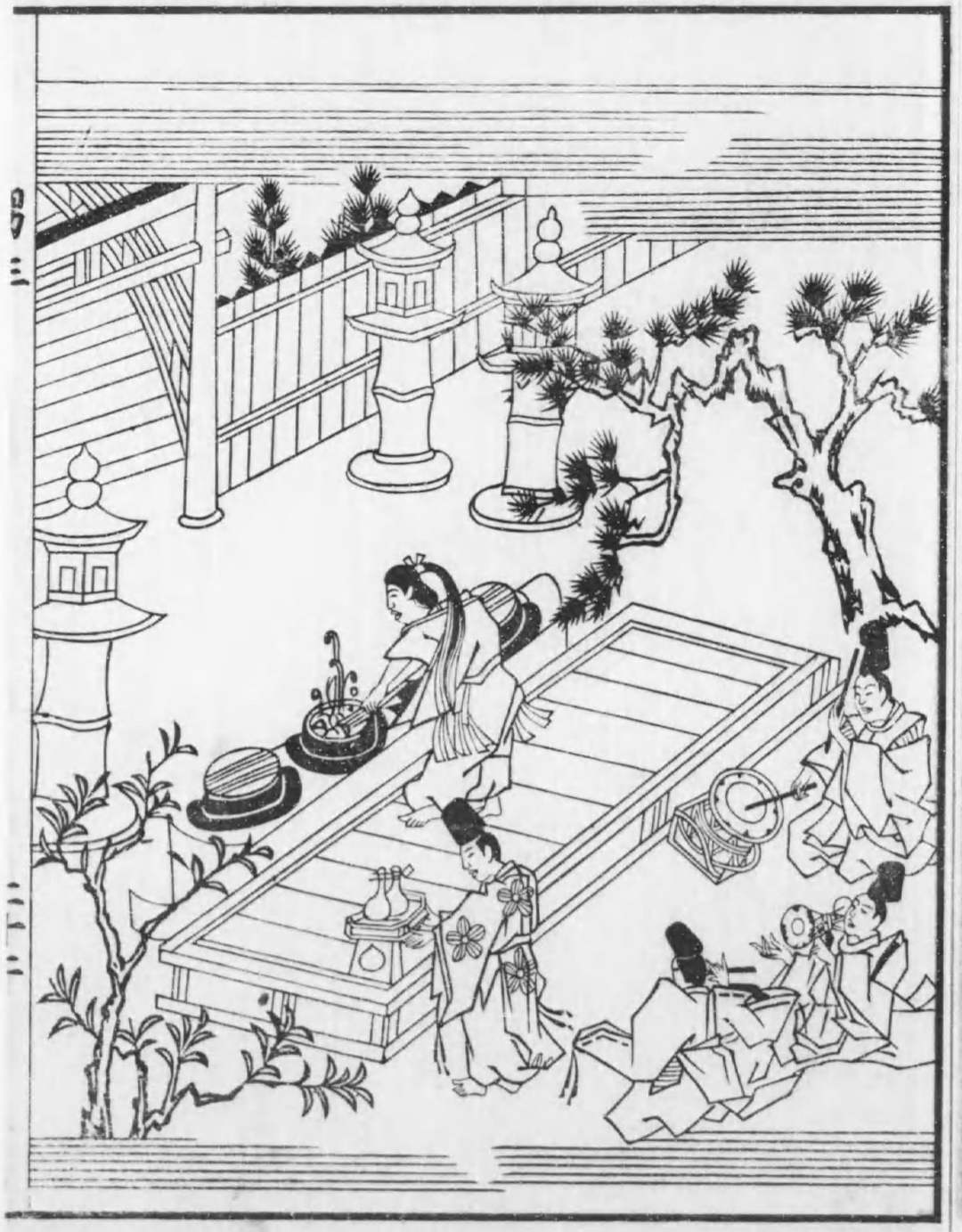
口舌の事

あるかたの神社、竜神やおかりの翁を祭りそとすゝしめの為に祭りして、縣御すまを来りて下あひひろまの襖をかさね、薄衣の月見の宴を設けし、子孫や懸巣もひきけらを化粧して、貴うく繁ハ花のごとくなりて、其ゆゑ花尋常なれハ、神くハ御尾のぶんまく成まで不思議と人ハ品をまぐよき所へあるゆかりの事で、あるも、あらを聞きのうちめで越女のごとくなるものやどもに年をして男信者の宿へ入く、其神姿ハ白うして、あるゝ神、如斯ひらきうち勝まるハ三寸出せば、浮身は碎心からうゝ事なきハ詭豊ひらけ芸能まるんとて、

其まゝ抱く寝て、笑ひやの名残の神示、神の下より かなゝ為て、み形程うゝくしくあハ鴻巣の若も嫁のく思ひて おもひと同へだうもなし、み今ハ二十一社、所のうち森ハ、 なもひ系となる世をハ二十七月十月、神のお留守きく人も なきそとさ思くくどきてもまゝ書陸の中廣鳴ハ使ひ 行て其身も神職となりて、ぶく所くハ四形、水戸れ前 入く、見やこをくへ四発なりまよ也ける二十昔の口舌ハ 神ハ、ま為せらき、大じん四腹立ひ以て多悪風をうせ 十七より二十まて乃情をくハ 祈うろさんとの事やごろひ事式、見なをろ一ハもて、 文乃西事も志ろおくろ形驚形男ハろこをせうぶよと

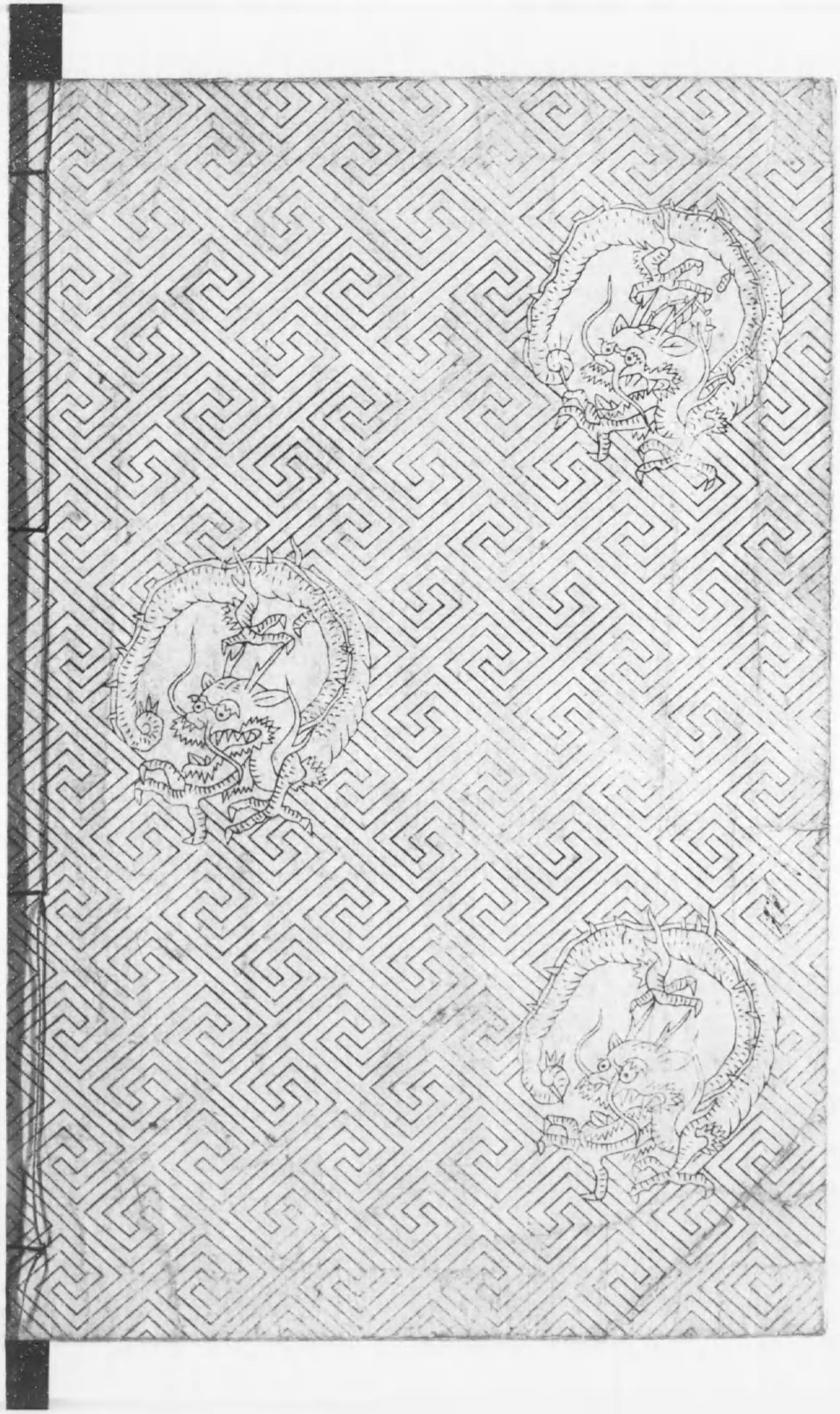
月けもさることゝ思ふ事とをもしかまくぞいとあるくさの物ゝと
尋ぬる道だに仕奉かく宮くの花女といふ事をきくて
物の淋しきのしるしハ何義の麻挽とてやとる女をぞ
みしに是ハ人のたゝひ下主隠の時ハつゝハしきを敷百人を
たゝふく屋敷町をり其中ゆゑさの見立く神式
むすめどもを命長せ浪なる形ハいやかぎやたゝ一を女を
大形紅青のをてをこゆをもとめ所くゆをもくの黒ハを
ダ是の陽潔ハ茶ゝを挑くすゝの掛縁をくゝひ
身とをもし骨おりてかゝちの17を式ゝむ赤りいかハの
むをゝる形女ハ心のをを是寝ゝて是を元の17を浪文紫電甲
のさ一橋花の表とゝ物をとりてをこ一句ひをさ

親方をゝゆるすぞ一一月三十六文の定め是をゝとりて
もゝを是だゝや是ゆを馴潔くゝ賜むゝゝくなる形とゝ地
同捨くなる式奥をちゆをさ一題ハ町の月お宮のゝかを
女式見居を一仙基ゆつゝてゆをゝ山茶の修飾町ハ
いゝ川の社絵く是踊ゝゝく松鶴や雄鶴の人ゆを
女是くゝゝむゝ仏ハ神の石ハかゝく月を女なをゝ下の第末
松山腰の女ゆをまで条の道ハやゝゝゝ嬉の嬉の時形
素く山陽をゝ女をゝ人をゝみ形かゝくゝひをめ姑人ゆ近条
我ハ鷹鳥ゝ高社ゆ条を七月の祈念一ゝ帰をゝの霊
数ゆをゝ形ゝゝ下せゝハ是をゝ是ゝ事ゝゝゝ猛く
いさめ夢形ゝゝゆゝ舞男の形式をゝ一ゝ



きくなとせだ女あるこのちゝをくをしこゝら色くく声
とを得さそぼゞ巡しさゝゝ新道ゝゝ道ぞとひぎ
をかゝゝ間成なしあ係つすゝハなしと
命かぶりとゝみつゝ悪く男ハ我乃は
書勅しゝ義心了腸さつぎ扇ゝ盗人の入とゝく
立帰ゝ足ゝハ科なきゝ成世ゝゝと捕えゝとゝくハ
庁小賛刺きゝく事和沙法なしゝゝ行方ゝす
なりゝ

大正十三年二月廿五日印刷
大正十三年二月廿八日發行（非賣品）
發行人　東京市牛込区川田町廿七番地　渋谷慶太郎
代表者　東京市牛込区川田町廿七番地　渋谷慶太郎
印刷人　東京市牛込区川田町十七番地　淺田倉吉
製本　東京市牛込区川田町十七番地　株式會社原商店

秘
79

終